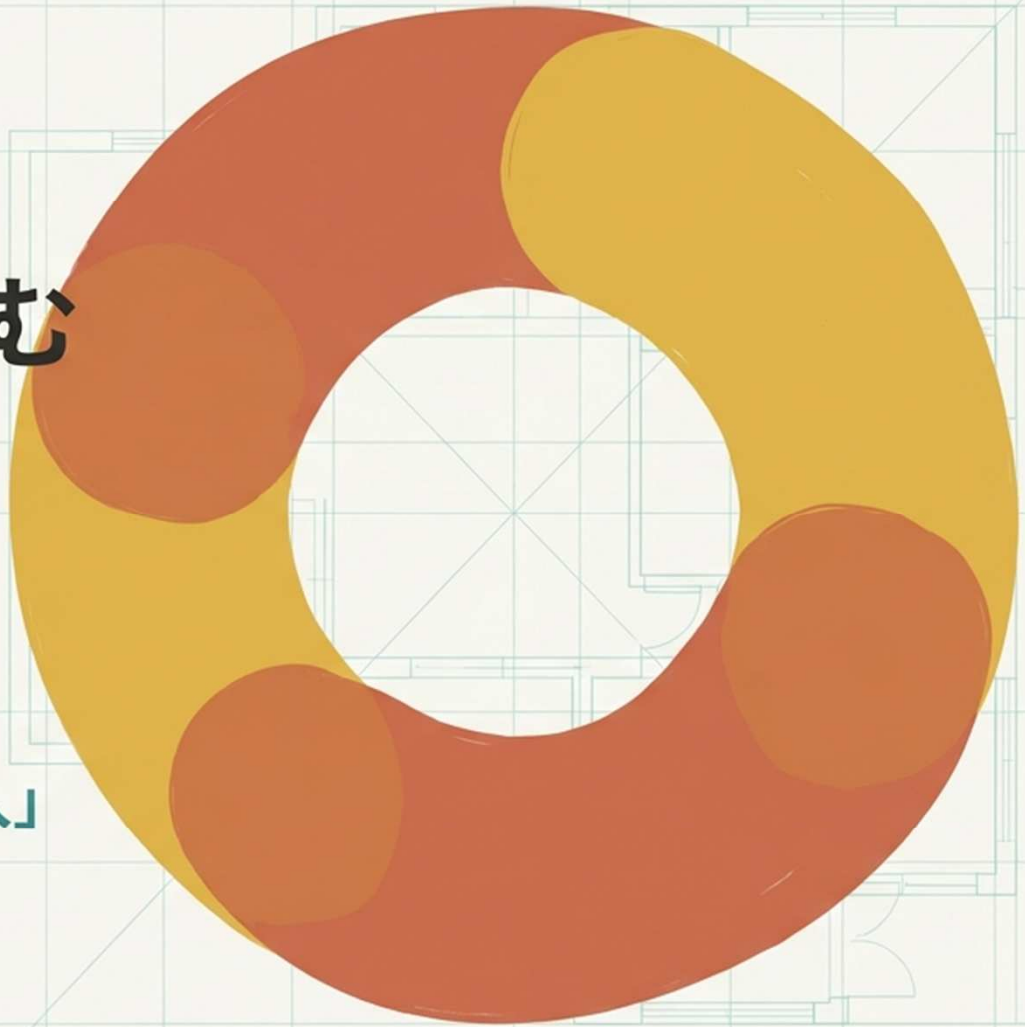
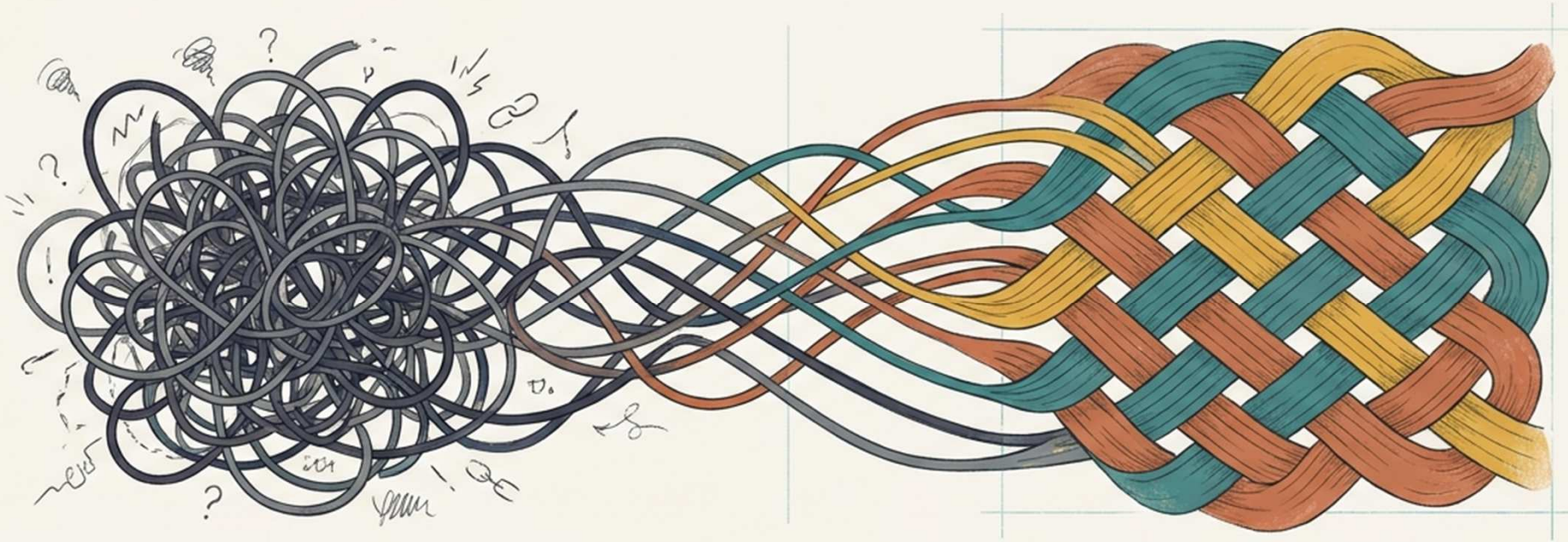
こどもと家庭を守り、育む「地域エコシステム」のつくり方

「家庭支援事業の構築」と「子ども・若者のセーフガーディング導入」実践ガイド



NotebookLM

制度が拡充する今、現場に問われているのは「制度をどう動かすか」



こども家庭センターの設立や日本版DBSの導入など、こどもを取り巻く法制度は大きく変化しています。

しかし、制度やルールを形骸化させず、現場の力に変えるるためには、「個人の資質」に頼るのではなく、地域全体の「仕組み」として機能させることが不可欠です。

NotebookLM

両輪としての「守りの土台」と「攻めの支援網」

NotebookLM

セーフガーディングとは何か？

個人的な行為

パラダイムシフト：
大人が「守ってあげる」個人的な行為から、子ども自身が声を上げられる環境を「組織として整える」包括的な取り組みへ。

組織としての仕組み

目的

暴力や搾取、ハラスメント、事故などあらゆる危害から子ども・若者を守り、安心して過ごせる環境を構築すること。

対象

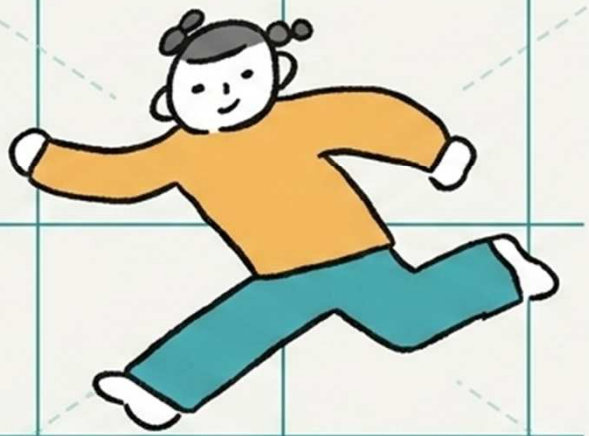
役職員だけでなく、ボランティア、インターン、業務委託先など、組織の活動に関わるすべての人に適用される。

NotebookLM

根底にある「子どもの権利」4つの原則

1. 命を守られ成長できること

生命・生存・発達への権利



2. 差別のないこと

あらゆる状況下において平等に扱われる権利

3. 子どもにとって最もよいこと

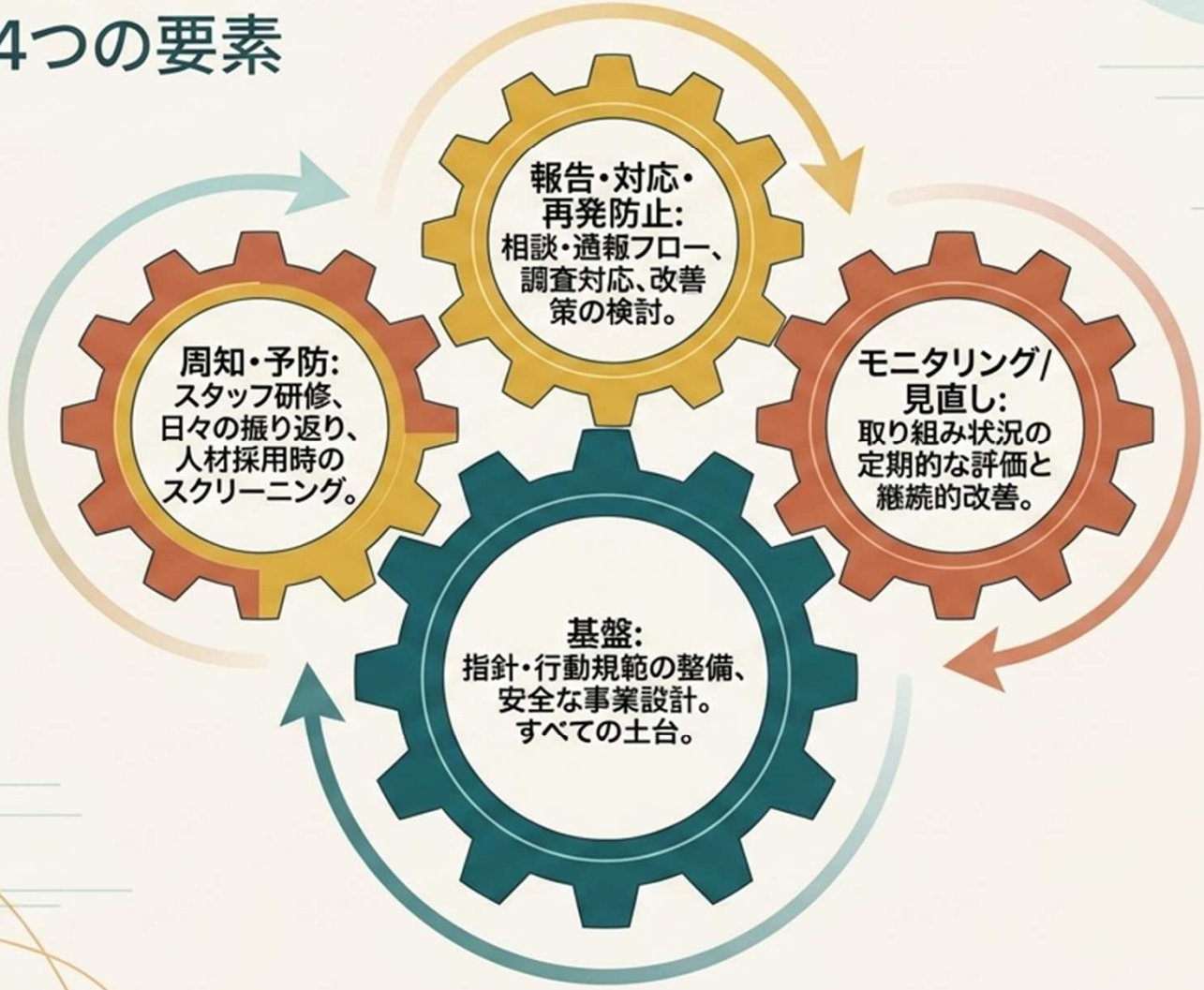
最善の利益の考慮

4. 意見が聴かれ尊重されること

意見表明権。子どもは守られる対象であると同時に、安全な環境をともにつくる主体である.

NotebookLM

セーフガーディングを駆動させる4つの要素



NotebookLM

【STEP 1】組織の現状把握と指針の策定

現状の棚卸し

既存のルール、子どもと関わる場面、関係者の範囲を洗い出し、リスクと「すでにできている安全」を可視化する。

現場の声を反映

特定の部署だけでなく、現場やプロジェクトのコアメンバーが指針策定プロセスに参加する。

行動規範の明確化

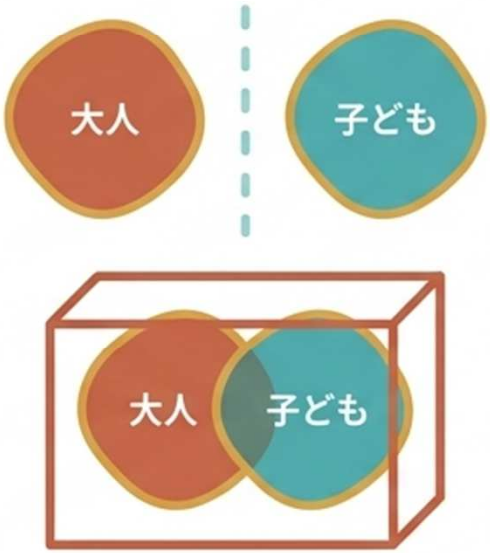
組織の活動に関わるすべての人が、自分の業務とのつながりや役割を意識できるルールを設ける。

NotebookLM

【STEP 2】周知・予防と日々の境界線（バウンダリー）

小さなサインを拾う

子ども自身が「なんだかモヤモヤする」と気づき、安全に表現できる環境をつくる。



閉じた関係性の排除

特定の子どもとの私的な連絡や、周囲から見えにくい関係性は、立場を利用しやすい状況を生み、リスクを高める。

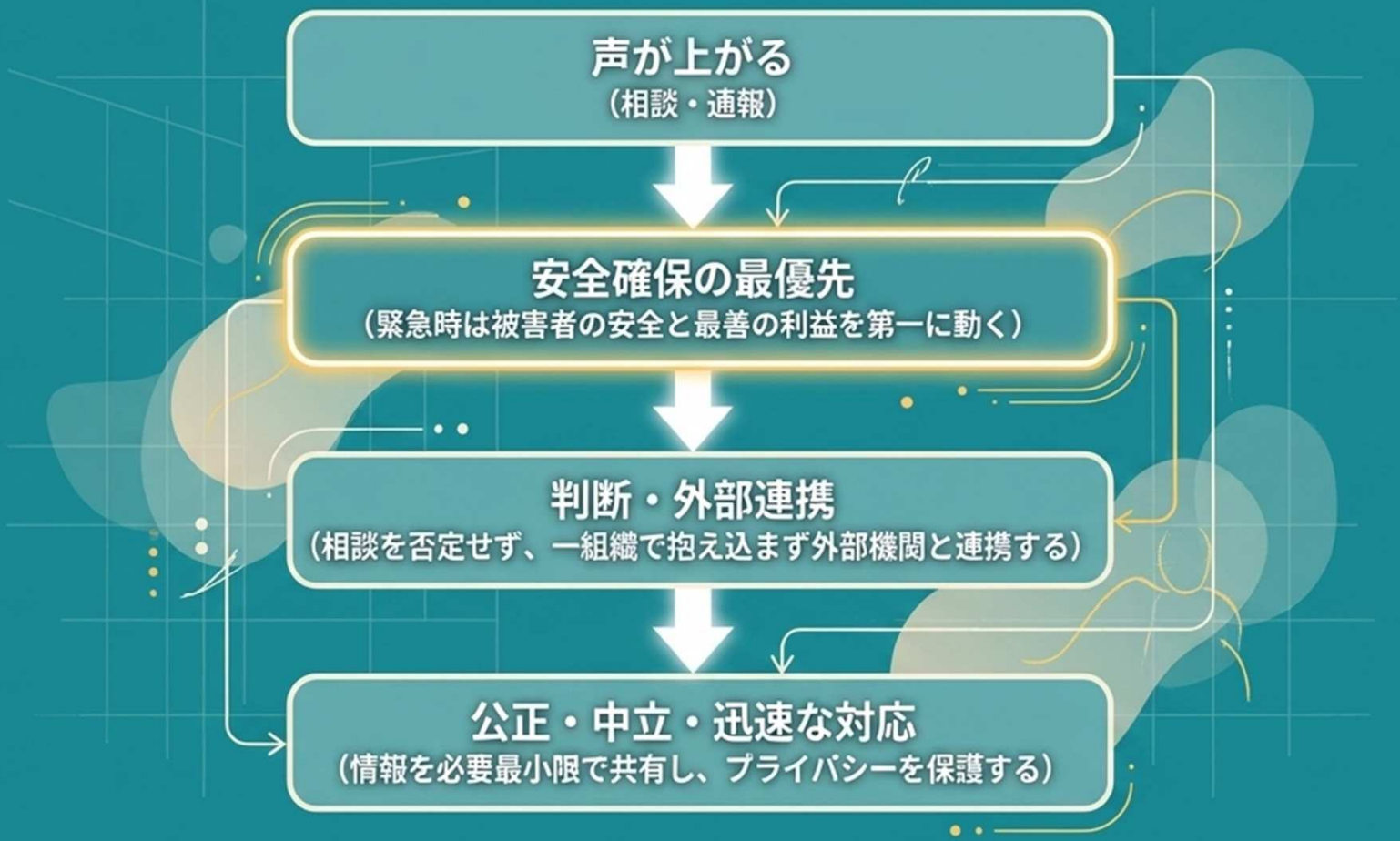
日常の振り返り

職員同士で「対応に迷った場面」を記録・共有し、違和感に気づく感度を組織全体で高める。

NotebookLM

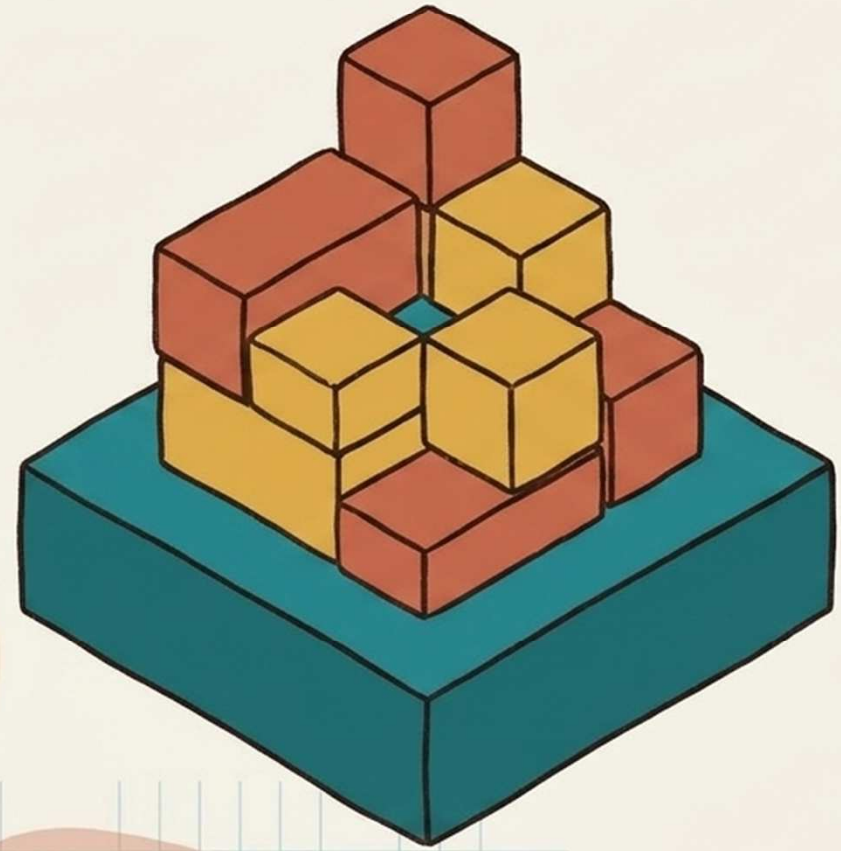
【STEP 3】報告・対応フロー
―「声が上がる」は機能している証

問題が「起きないこと」を前提にするのではなく、
声が上がったときに適切に対応できる体制が不可欠。



NotebookLM

組織の安全を土台に「攻めの支援網」を構築する



強固なセーフガーディング体制が整うことで、初めて地域へと踏み込み、多様なニーズに応える「家庭支援事業」を安全かつ効果的に展開することができます。

ここからは、地域の実情に合わせて支援網を広げていくための実践的なステップを見ていきます。

NotebookLM

家庭支援事業を構築する4つのSTEP

STEP 1
支援対象者とニーズ把握
既存データと現場の声から隙間を見つける

STEP 2
事業内容の検討
地域の実情と強みに合わせた設計

STEP 3
担い手/委託先の確保・育成
他分野発掘と伴走

STEP 4
予算確保・庁内の調整
必要性の見える化とスモールスタート

NotebookLM

ニーズを把握し、支援の「隙間」を設計する

現場の声から収集

相談窓口や要対協のデータだけでなく、日々のソーシャルワークや地域資源との接点から、こぼれ落ちているニーズを統合する。

既存事業との役割分担

既存の事業でカバーしきれない「狭間」を埋めるように事業内容を設計する。

地域の実情に最適化

国のガイドラインに適合させつつ、担い手となる資源の強みを活かせるよう仕様を協議しながら調整する。

NotebookLM

事業ポートフォリオ：4つの主要事業の比較

事業名	目的	得られる効果・現場の声
子育て世帯訪問支援事業	家事・育児支援を通じた関係構築	「電話や窓口ではわからない、普段の様子や潜在的課題がフィードバックされる」(藤枝市)。掃除等の相談をきっかけにフードパントリーへ繋ぎ、信頼関係構築（喜多方市)。
児童育成支援拠点事業	居場所の提供、生活習慣の形成	地域コミュニティへの参加と孤立防止。
親子関係形成支援事業	親の養育不安軽減、関係性の再構築	家庭内の心理的安定と虐待の一次予防。
子育て短期支援事業	緊急時の一時的な養育支援	家庭の負担軽減、自立のきっかけ。制度的な「狭間を埋める」支援（東御市)。

NotebookLM

【STEP 3】委託先は「探す」のではなく「育てる」

他分野の担い手発掘

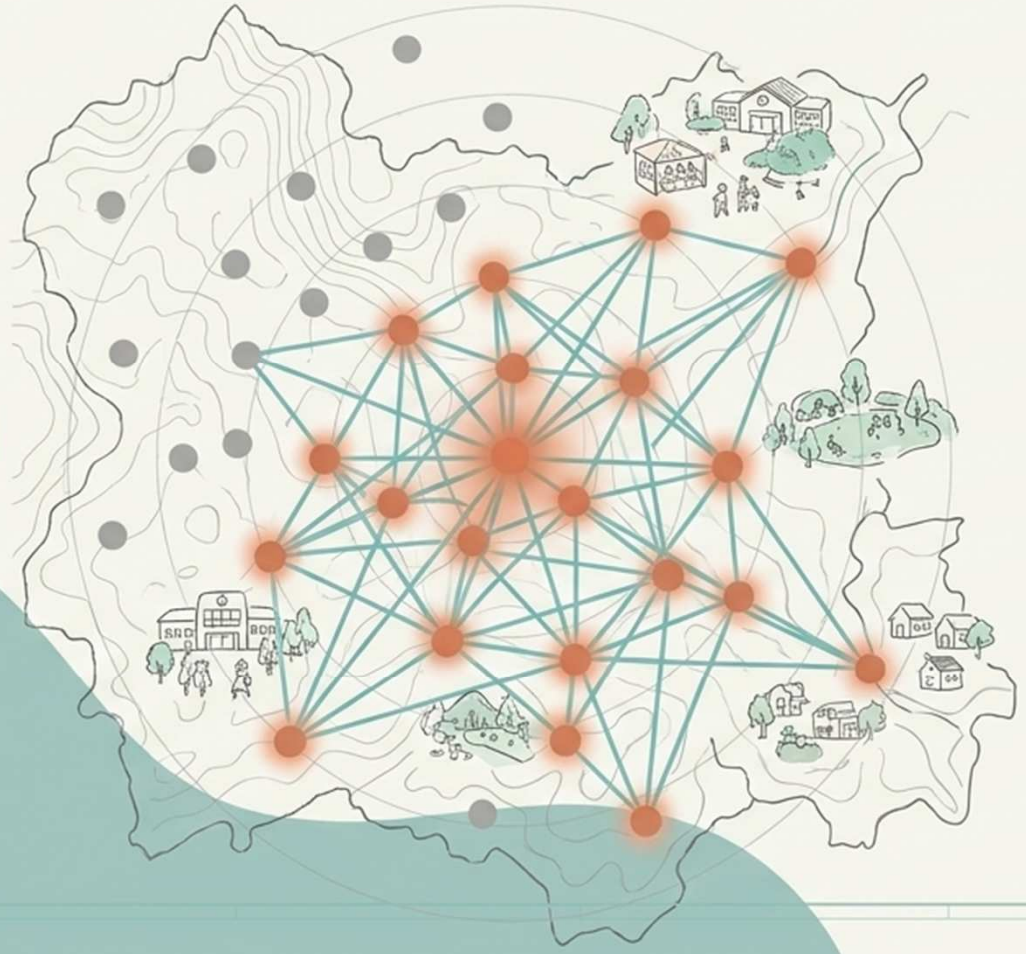
こども・子育て分野に限定せず、高齢・障害福祉事業者や地域の個人など、他分野のリソースにも参入を促す。

丸投げしない伴走姿勢

委託して終わりではなく、行政が伴走し、事業者間のネットワークを作ることで支援の質を担保し、定着を図る。

NotebookLM

地域資源の「可視化」と「ネットワーク化」



インフォーマル資源のリスト化

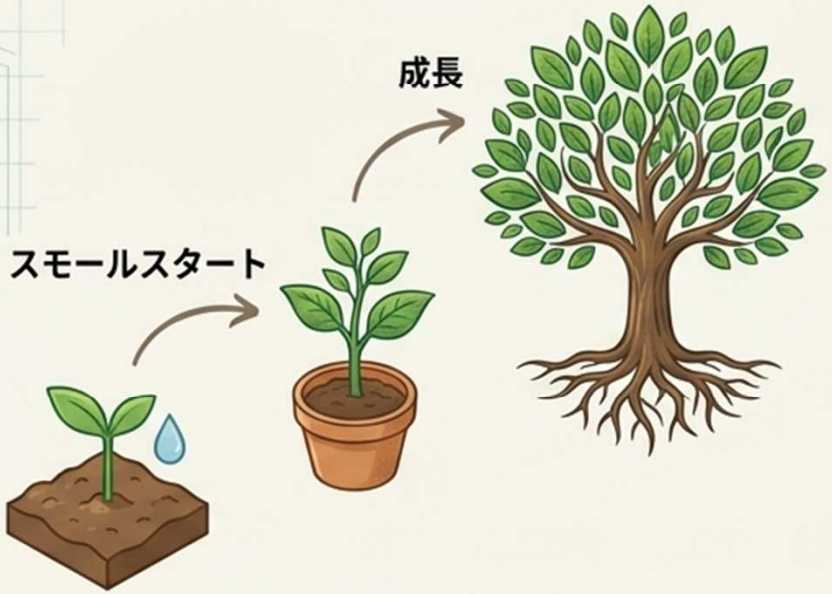
日々のソーシャルワークを通じて、
地域に眠る資源を把握・可視化する。

対話と場づくり

市民も含む多様な主体が情報やノウハウを共有する場を創出することで、
潜在的な担い手の発掘へとつなげる。

NotebookLM

【STEP 4】庁内調整と実装へ向けた「プロセスの工夫」



必要性の「見える化」

事業を行わない場合に生じるこどものリスクや、実施した場合の中長期的な予防効果を定量・事例で提示する。

スモールスタート

ゼロから完璧を求めず、先進事例を参考にまずは小規模（モデル実施）で試行し、運用課題を検証する。

スクラップ＆ビルド

類似事業の見直しや、国補助金の組み合わせにより予算を効率化し確保する。

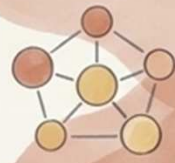
NotebookLM

広域連携：都道府県によるエコシステム支援

市町村単独での事業構築が困難な場合、都道府県の広域性が鍵となる。

長野県の事例

児相圏域等のエリア別懇談会を実施し、複数市町村による資源共有や事業検討を推進。



大分県の事例

独自の補助金制度を設計し、市町村の事業立ち上げ（動機づけ）を後押し。

岐阜県の事例

社会的養護施設に対し「参入時の報酬試算等」を可視化し、市町村とのマッチングの場を創出。

NotebookLM

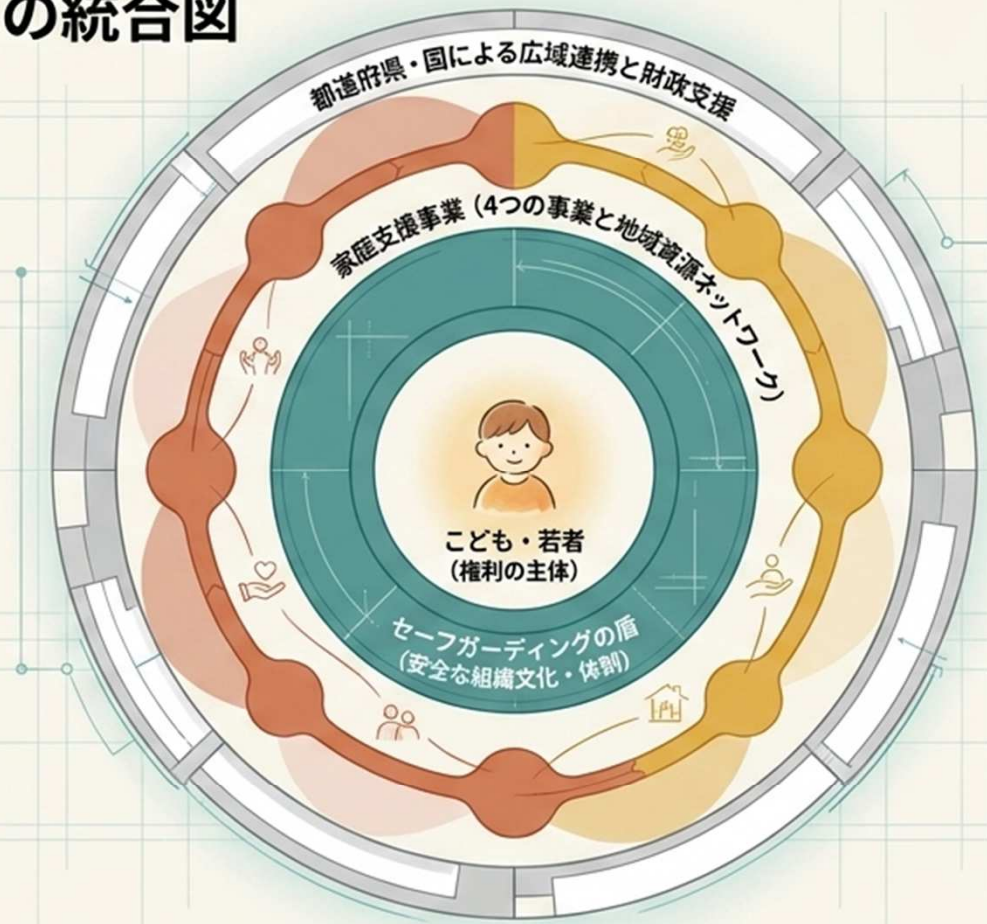
大人もこどもも尊重される組織文化へ

セーフガーディングを持続させるためには、子どもの権利だけでなく、それを支える大人自身の権利や「余白」も大切にされなければならない。

活動を続ける自分たち自身を労い、互いを尊重し合える環境が、結果として「こどもが安心して声を上げられる」文化へと直結する。

NotebookLM

こどもを守り、育む「地域エコシステム」の統合図



これらは独立した施策ではありません。こどもを中心に据え、安全な組織基盤（守り）と積極的な支援網（攻め）が連動し、それを広域行政が支えることで、初めて強靭なエコシステムが完成します。

NotebookLM

制度を息づく文化（The Living Blueprint）に変える

私たちが手にしたガイドブックは、あくまで「青写真（設計図）」です。
今日から、自分たちの組織の土台を見直し、地域の小さな隙間に目を向けること。その一つひとつの実践が、設計図に命を吹き込み、こどもたちを包み込む確かなコミュニティへと育っていきます。

NotebookLM